

# 幻想郷に入った少年の 日常

モリリン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

目を覚ますと知らない場所にいた音街恭弥は、幻想郷でどんな出会いをして、どんな生活を送るのか。様々な人達との日常を描いた小説です。

# 目次

## 第1章 幻想郷

幻想郷に入った少年	1
選択と決断	7
能力の覚醒	11
ここは夢を見れる宿	18
始まる宴会、出会いの夜（前編）	25
始まる宴会、出会いの夜（後編）	32
式神と漢の約束	41



# 第1章 幻想郷

## 幻想郷に入った少年

初めましてモリリンです。

処女作ということで書かせていただきました。

なるべく早めに更新していきたいと思っています。

楽しんでいただければ幸いです。

それではどうぞ！

—————

「いっはどいだ？」

音街恭弥は小さく呟いた。

「なんで目が覚めたら木に囲まれているんだ？」

恭弥の周りには大きな木やキノコがたくさんある場所にいた。空は明るい。木に囲まれているから少し薄暗く感じる。それに少し気分が悪くなってきた。

恭弥は自分が目を覚ます前の事を思い出そうとしていた。

「確か、コンビニで夜食を買ってオールしてゲームしようと思ったたら急に眠たくなって

そのまま寝ちまつたんだよな？それがなんでこんなことになってるんだ？？」

恭弥はそう呟きながら辺りを見回した。

「しかし、本当になんもねえなー、。ま、考えてもしゃーねーしとりあえず歩くか。気分もあんま良くねえしな。」

そう言つて立ち上がり森の中をひたすら歩き回つた。そうしていると一軒の家を見つけた。

「まさかこんなところに家があるなんてなー、おーい、誰かいませんかー？」

そう言つてドアを叩いてみたけれど、出てくる気配がない。

「はあー、誰もいねえのか、どーすつかなー、あんまり長居はしたくねえんだけどとりあえずあたあるくかなー。」

「あら？誰かしら？もしかして外来人？」

家の前で困っていると不意に声をかけられ振り向いてみるとそこには金髪の美しい女性がいた。突然のことにびっくりしてとっさに声がでなかった。それほど美しくかつたからだ。

「外来人つてのはよくわからんが、気づいたらこの森にいて、彷徨つていたら偶然この家を見つけて誰もいないから途方に暮れていたところだ。俺は音街恭弥。君の名前は？」

「アリス・マーガトロイドよ。そしてこの子は上海つて言うの。よろしくね。」

「シャンハイ！」

「人形が喋った!？」

突然人形が喋り出したことに驚いていると、人形は勝手に動いてこちらに手を差し出して来た。

「握手したいってさ。」

「シャンハイ！」

「お、おう、よろしくな！上海！」

「シャンハイ♪」

「ふふ、気に入られたみたいね。」

上海は恭弥の周りをずっと飛んでいる。

「それはよかった。ところでここはどこなんだ？俺のいた世界とは違うのか？」

「ええ、多分そうよ。あなたは外の世界から来た、こっちの世界では外来人と呼ばれているわ。そしてこの世界は幻想郷と呼ばれる忘れられた妖怪や、そのほかにも様々な者たちが来る世界よ。ここまでは大丈夫？」

「ああ、なんとかな。続けてくれ。」

嘘です。整理が追いついていません。

「この幻想郷には外の世界とこっちの世界を分けるために結界が張られているの。その

結界がたまに歪むことがあって、そのせいで、外の世界の人間がこの幻想郷にきちちゃったりするの。多分そのせいであなたはこの幻想郷にきたんだと思うわ。」

つまり、その結界の歪みのせいでこっちにきちちゃったわけだ。

「なるほどね、この世界のことはわかった。じゃあここはどこなんだ？森のようだけどもなんだか薄気味悪いし。」

「ここは魔法の森と言われる場所よ。私もこの森に住んでいるのよ。ここの家も住んでいる人がいるけど、今はいないようね。」

「うーん、元の世界にはどうやってら帰れるんだ？」

「博麗の巫女と呼ばれる人に頼めば元の世界帰れるわよ。もちろん、ここに残るという選択肢もあるわ、それは貴方が決めることだけどね。」

「その博麗の巫女つてのはどこに行けば会えるんだ？」

「ここから遠いところに博麗神社という場所に住んでいるわ、よかつたら案内するわよ?。」

「ほんとか！それは助かる！けど遠いんだろ？大丈夫なのか？」

「平気よ、飛んで行けば早く着くわ。」

えっ、、、。まてまて

「あんたも飛べるのかよ！もしかしてここの住人はみんな飛べるのか？」

「全員つてわけじゃないけど飛べる人は飛べるわよ。」

なんじゃそら、どこの竜の玉を集める世界だよ、と思いつながらふと思つたことを聞いてみた。

「俺も飛べるようになるのか?」

「わからないけど、頑張ればできると思うわよ?この世界に残るのならだけどね。」

まさか!?まさか空を飛べる時がくるなんて思わなかつたわ。

「そつかー、ちなみにどうやって飛んでるんだ?」

「私は魔女だから魔力を使って飛んでいるわ、貴方は人間だから霊力を使って飛ぶのが普通ね。」

霊力?ブーチかなんかか?

「自分の中に流れている霊力を感じて、出す感じね。まあ今はまだ無理だと思っわ。さ、それじゃあ行きましようか、落としちやつたらごめんね。」

「え、?」

手を掴まれたかと思うと、スツと自分の足が地面から離れて宙を浮いたかと思うと、一気にスピードが上がり、俺は恐怖のあまり気を失ってしまった・・・。

—————  
どうだったでしょうか、上手く書けていたら嬉しいです。

悪いところなどは是非是非コメントなどで教えてください。  
それではまた次回に!!

## 選択と決断

少し昔のことを思い出していた。

学校でいじめられ、家に引きこもる生活を送っていた自分は、とうとう親にも見捨てられて、親のスネをかじり行きていく日々慣れてしまった自分は現実を捨て、画面の中に生きた。

自分でもわかっていた。どれだけ最低な事をしているか、頑張ればやり直せていたんじゃないか、そう思っているも逃げてしまう、イジメと言う理由いわけを使って、。

そして、そんな日々が続いた中、この幻想郷に突然やってきた、。

目を覚ますと見慣れない天井があった。ゆっくりと起き上がると、布団がかけられていた。辺りを見回すと少し古めだが手入れが行き届いた木材の壁、ガタガタいいそうな襖ふすまがある。

「いっいとはどっさだ?」

そう言いながらこれまでのことを必死に思い出した。

「確かアリスに腕を掴まれて空を飛んだと思っただけで急スピードで地面から離れて、そこから記憶がないってことは気を失っちゃったんだな、、、。」

「ええそうよ、びっくりしたわ、アリスが来たと思っただけで誰かを背負ってて気を失ってるなんて驚かない方がすごいわよ。」

「、、、、つ!?!」

後ろの方から急に声がして驚いて振り返ると、赤と白の脇が出ている巫女服を着た美少女がいた。

「貴方が博麗の巫女、、ですか?」

「敬語じゃなくていいわよ。私は博麗<sup>はくれい</sup> 霊夢<sup>れいむ</sup>。霊夢でいいわ。貴方は?」

「俺は音街 恭弥 《おとまち きょうや》。よろしくな。」

「ええ、よろしく。ちよつと待っててね、今アリスを呼んでくるから。」

「ああ、わかった。」

そう言うのと霊夢は廊下に消えていった。しばらくしてアリスがやってきた。

「恭弥! 起きたのね? 大丈夫? どこか痛いとかある?」

「ああ、大丈夫だよ、心配かけてごめん。」

「いえ、私こそごめんさい、早く飛びすぎたわ、、。」

2人が謝罪をしていると、霊夢が。

「はいはい、終わったことはもういいの！それより恭弥。」

真剣な顔つきになって恭弥を見つめた。

「アリスから聞いたわ、貴方、外人人なんですよ？どーするの？戻りたいの？それともこの世界で生きるの？」

「.....」

恭弥は考えた、元の世界に戻ってあの生活をもう一度送るのか、それともこの世界で新しくゼロから始めて行くのか。

「、、、俺、残るよ、この世界で生きたい。」

そう言うときアリスは驚いたような顔をしてこちらを見ていた。霊夢は表情一つ崩さない。すると霊夢が

「、、、わかったわ。貴方が選んだ道を私がとやかく言う権利はないわ。」

「ああ、ありがとう。」

「けど貴方、一体どこに住むの？場所は決めているの？」

「あつ、、、、。」

「そーいや何にも決めてなかったな、どーしよ、知り合いなんているわけないしなー、」。

「しよーがないわね、私の友達に家を作ることができてる子がいるの、そいつに頼んでみるわ。」

「ほんとか！ たすかる！」

まさか家を作ってもらえるなんて思いもしなかった。本当に嬉しいや。

「家がでてるまではこの神社でゆつくりするといいわ。じゃあ私は早速頼みにいってくるわね。」

そう言うとう霊夢は部屋から出ていった。

「私もそろそろ帰るわ。じゃあ恭弥、また会いましょうね。」

「ああ、ありがとうなアリス。」

そういつてアリスも出ていき部屋の中は俺一人になった。

「さて、どんな生活が待っているかな！」

## 能力の覚醒

（アリス side）

上海と一緒に魔理沙の家に向かっていた。もうすぐ着くところで聞き覚えのない声が聞こえてきた。

「はあー、誰もいねえのか、どうすつかなー、あんまり長居はしたくねえんだけど、とりあえず辺りを歩くかなー。」

あら？魔理沙の家の前に誰がいるわね、もしかして泥棒か何かしら。もしそうだったら容赦はしないわ。

近づいてよく見てみると見慣れない服装をした男性が立っていた。  
そこで私は声をかけてみた。

「あら？貴方は誰かしら？もしかして外来人？」

男はぱつと振り返ってこちらを見た。顔はそこそこで、体格も普通の男だった。

話してみるとやはり彼は外来人だった。私はこの世界がどんな場所で、ここはどこなのか彼に教えた。そしてビックリすることに上海が会ってまもない彼をえらく気に入ったのだ。そして彼も上海を気味悪がらずに普通に接してくれた。そこがとても嬉

しかった。

そして彼と仲良くなれたらいいな、。そう思い始めた。

彼を博麗神社に連れて行こうと決めた時、少し残念に思ったけどそれも仕方ないと思つた。飛ぶ時に彼の腕を掴んだ時、少しドキドキしながら、そして彼を意識しないように、早く行こうと思ひ急いで博麗神社まで飛んで行つた。

「はあー、やつと着いたー！恭弥ー、着いたわ、。よ、。」

もう少しで着くというところで恭弥の方を向いてみると、恭弥はぐったりと意識を失つていた、。。

（霊夢 side）

「はあー、平和でいいわねー。」

霊夢は縁側で茶を飲んでいた。空を眺め、足をぶらぶらさせながら。

「こういつたゆつくりした時間って大切よねー。」

そう言つてお茶をすすする。はあー、と息を吐きながらまた空を眺めた。すると向こうの空から段々と人影が見えてきた。よくみるとそれはアリスだった。

「あら？アリスじゃない。どうしたのかしら、誰かを抱えてるようだけど、。はあ、またなんか厄介ごとかしら、めんどくさいわねー。」

そう言つて待つてしているとアリスが降りてきて早口に言つた。

「靈夢！すまないんだけど彼を寝かしてくれないかしら、私が早く飛んじやつて気絶しちゃったの！お願い！」

「とりあえず落ち着いて、アリス。わかったわよ、こつちに彼を運んできてちょうだい。お布団をだすわ。」

「ありがとう、靈夢！」

そう言つてアリスは急いで部屋に入り彼を寝かした。それからアリスにここまでのことを聞いた。彼は外来人で、ここにきて元の世界に帰るか決めにきたと聞いた。

「まあ、起きてから本人に聞きましよう。お茶、入れてくるわ。」

「ええ、ありがとう靈夢。」

そう言つてアリスは少しそわそわしながら彼が起きるのを待つていた。

(アリスがあんなに気にするなんてね、何かあったのかしら？)

そう思いながらお茶を入れるべくその場を離れ、アリスにお茶を渡して彼が起きるのを待つた。

彼が起きてから、アリスを呼んで彼に残るかを聞いた。すると帰るかと思つたら彼は残ると言つた。彼が何を考え、悩み、結果残ることを決めたのかは、わからないが彼が決めたことに私がドーコー言うことではないと思つた。ただ、。。。

「けど貴方、一体どこに住むの？場所は決めているの？」

「あつ、、、。」

やっぱりね、そうだと思ったわ。しょーがないわ、私が萃香やにとりな頼んでみましょ。はあ、めんどくさいわねー。家がない間はここに住ませておきましょ、色々してもらわなくちゃ。

家はどうかを言い、その間ここに住めばいい、そう言っつて私はにとりと萃香を探しに言っつた。

〈恭弥 side〉

住む家ができるまで、博麗神社の家事、洗濯など様々なことをしていた。時間が空けば霊夢から霊力の使い方を教わっていた。

「いい？ 霊力つてのは人間なら誰でもあるものよ。自分の体の中にある霊力を感じてそれを外に出す感じよ。まあまずは霊力を感じることからね。目を瞑って、集中して、、、。」

感じろっつて言われてもなー。取り敢えずやってみつか！ 自分の中の力を感じる、、、。おっ？ この感じか？ これを出すイメージで、、、。

「はっつっ!!」

すると恭弥を中心にとつともない衝撃波が霊夢を襲った。

「えっ、、、？ うそ、何この力、、、。」

靈夢は少しあとずさりながら両目を見開いてこちらをみていた。しばらくして衝撃波は収まり恭弥は靈夢にこう言った、。

「えつ、、？何これ、、。」

「いや、知らないわよ！貴方一体何者なの！」

「いや、俺にも何がなんだか、、。」

「はあ、、。こんな時に紫がいてくれればいいのに、、。」

「はーい！呼ばれて飛び出てゆっかりーん!!」

急に何もなかった空間に亀裂が入りそのスキマから人が出て来た。

「えつ?」

「やつぱり出たわね。ねえ紫、彼本当に人間なの？あの靈力は人間のそれじゃなかったわ。」

「ええ、彼は真正正銘、人間よ。この世界に来て彼、能力に目覚めたみたいね。」

「えつと、、。だれですか?」

「私は八雲 紫《やくも ゆかり》。紫って呼んでね。この幻想郷の創造者で管理者よ。ようこそ幻想郷に。歓迎するわ、音街恭弥君♪」

そう言つて紫はニツコリと笑つた。

「あ、ああ、よろしくな、紫。」

「ねえ、紫、恭弥がもう能力に目覚めているって本当なの？ 幾ら何でも早すぎよ？」

「ええ、私もそう思ったわ。けど確かに目覚めているわ。」

「なあ、能力ってなんだ？ よくわからんのだが。」

そう言うと紫が説明してくれた。

「能力っていうのはこの世界ではとても重要で霊夢や私も能力を持っているわ。私は

「スキマを操る程度の能力」、霊夢は空を飛ぶ程度の能力よ。」

えっ？ 何それ、2人ともチート級なんだけど、しかもそんな能力を他にも持っている人がいるの、、、恐ろしや幻想郷。

「でもこの世界では人間と妖怪が共存して生きているから、能力、ましてや妖怪と人間じゃ妖怪が圧倒的に強く、均衡きんこうが保たれなくなるわ。そこで私が考えたのが「弾幕だんまくごっこ」っていう決闘方法よ。霊力、妖力、神力、能力を使って弾幕を作って相手に当てたら勝ちっていうものよ。もちろん死なないようになっているし、これなら人間と妖怪が平等になれるってわけよ。」

なるほどな、よく考えられたものだ。

「そして貴方の能力だけど、「なんでもモノにする程度の能力」よ、簡単に言えば貴方がしようと思えばなんでもできるわ、それも、最大限の力で。まさにチートね。」

、、、すげえな俺、まさかそんな能力に目覚めるなんて。

「まあ、この世界のルールを守ってくれれば何も言わないわ、では、改めてもう一度、ようこそ幻想郷へ！」

「ああ、これからよろしくな!!」

それから、霊夢との練習の日々が続いた。

そしてついに俺の家が完成した。

## ここは夢を見れる宿

博麗神社に住んでから数週間がたったある日のこと。

「恭弥ー、あなたの家が完成したから今から行くわよ。」

「お、本当か？今行く。」

居間でゴロゴロしていた俺は素早く着替えると霊夢と一緒に人里まで飛んで行った。

「俺の家どうだった？俺的にはあまり広すぎないほうがいいんだが、。」

「そうなの？まあ見てのお楽しみにしておいたら？」

「それもそうだな、早くみてーなー。」

1LDKとかかな？などと、期待を膨らませながらこれから住む家のことを考えた。

人里に着くと歩いて家まで向かった。するとあまりこの辺では似つかわしくない大

きな屋敷が見えてきた。

「大きな屋敷だなー、一体誰が住んでいるんだ？」

「誰っていうか、ここがあなたの家よ？」

「、、、、は？マジで言ってるのか？」

マジか、ここまで大きな家に一人で住むなんて寂しくて死んじまうわ。

「あんたにはここで温泉宿を開いてもらうわ。どうせ働くところとか無いんだしいいでしょ？」

「まあ、働くところが見つかったのはいいんだが俺一人で出来るものなのか？」

「そこは安心していいわよ、人里の何人かが手伝ってくれるそうだから。もちろん私も暇だったら手伝うわ。」

「それは助かる。じゃあ早速中に案内してくれ。」

「いえ、私はここまでよ。中にこの家を作ってくれた人がいるから、その二人にはお願いしてるわ。」

「そっか、ありがとうな霊夢。」

「どういたしまして。じゃ、またね、たまには博麗神社に来なさいよ。茶ぐらい出してあげるわ。」

「おう、じゃ、またな。」

そう言ううと霊夢は博麗神社に向かって飛んで行った。

「じゃ、俺もそろそろ入るかな。」

そう言つて中に入ると二人の少女がいた。

「、、え？」

もしかしてこの子たちが作ったのか？ 幻想郷すげえー、、。

そう思いながら二人の少女をもう一度見た。一人は大きなツノと瓢箪が特徴の女の子。もう一人は大きなリユックが特徴の女の子。顔はどちらも可愛い顔をしている。

「え？つてなんだい、同志よ！作ったのは正真正銘あたしたちだよ！」

「あ、ああ、すまん。まさかこんな小さい子たちが作っただなんて考えられなくつてや。」

「まあいいよ、ここに来たばかりだしね。これからよろしくね。私は河城にとり、二トリつて呼んでね。よろしくね。」

「ああ、よろしくな。俺は」

そう言つて握手を交わした。

「そんでこつちが、。」

「伊吹萃香だ、よろしくな。ところであんた強いでしょ？あたしと弾幕勝負しよーよ。」

「あ、ああ、またいつかな。」

「お、言つたね？鬼に嘘ついたらダメだからね。」

萃香はニツコリと笑つた。それとは反対ににとりは深くため息をついた。

「まあ、とりあえず中を案内するよ。ついて来て。」

そう言つてにとりは歩き出した。その後を恭弥と萃香はついて行つた。それからは大きな温泉を見たり、100人入つても大丈夫そうな大広間や多くの客部屋に案内され

た。それを全て見終わつた後に恭弥が

「だいたいのはわかつた。これからここでこの温泉宿を開けばいいんだな。」

「そーゆうこと。また河童のみんなで来るから待つてねー。じゃまたね恭弥ー。」

「ああ、ありがとうなにとり。」

にとりに手を振つて見送つた後、萃香を見て

「萃香はどうするんだ？」

「まあ、明日はここで宴会があるし今日は帰ることにするよ。」

「え？ここで宴会するの？」

「霊夢から聞いていないの？」

まさか博麗神社に住んでいて霊夢から聞いていないことがあるなんて思わなかつた。すると萃香が「あんたの歓迎会をするんだよ」と言つた。俺がメインなのになんて俺が知らないんだよ!!そんな気持ちを自分の中に抑えてふと、気になったことを聞いた。

「じゃあ食材とかどうしたらいいんだ？まだ何も無いんじゃないか？」

「食材は参加するみんながテキストに持つて来るから安心して。宿にも少し食材は置いてあるよ。ところで恭弥は酒飲めるかい？」

お酒はまだ飲めない年の恭弥は親に無理やり飲まされた時のことを思い出した。意

外と酒に強く、勢いに任せて飲み続けていると倒れて病院に運ばれたことがある。まあ、ある程度は飲めるので

「まあ、少しは飲める。」

「そーかい、そりゃよかつた。うまい酒を持って行くよ。まあ、それはそれとして。」

萃香は瓢箪の酒を一口飲み、獰猛な笑みを浮かべた。

「明日、弾幕勝負しようよ。ね?」

今まで霊夢としかしたことがなかったから自分がどこまでできるのか気になった。

「ああ、いいぜ。俺も少し楽しんだ。」

「よしーじゃあ明日の午前中に行くから準備してなよー!」

そう言つて萃香は走り出した。明日が楽しめと言わんばかりの笑顔で。萃香を見送った後何もすることがなくなった。

「さてと、これからどーするかなー。」

何をしようか迷っていると後ろから声をかけられた。

「恭弥。久しぶり。」

振り向くとそこにはアリスと上海がいた。

「アリス、それに上海も久しぶり。今日はどうしたんだ?」

「恭弥の家ができたって聞いて見に来たの、それにしてもデカイわね。」

「ああ、温泉宿を開くことになったんだ。萃香とにとりに作ってもらったんだ」

「そーなの。よかつたじゃない。頑張つてね。」

「おう！」

「ところでこの温泉宿の名前はなんなの？」

「そーいや考えてなかつたなー。どーしよつかなー。」

うーん、どーしようか。自分がこれから宿で客をもてなして過ごして行く自分を思い描きどうしていききたいのかを考えた。

「、、、夢見郷。」

ポツリとでた言葉はアリスの耳に届いた。

「夢見郷？」

「ああ、決めた。今日からこの宿の名前は夢見郷だ。来る客にいい夢を見れるような場所にしたっていう子供みたいな発想だけだな。そういう意味でつけた。どうかな？」

「ええ、とてもいいと思うわ。ね？上海。」

「シャンハイ！」

「よし、じゃあ今日からここは夢見郷だ!!」

そう言つてこれから住む宿、夢見郷を見上げる。これから始まる生活に期待を膨らま

せながら。

## 始まる宴会、出会いの夜（前編）

朝起きると見知らぬ天井が見える。ふと体を起こすと自分の部屋だと認識できた。早くこの生活にならなければと思いつながら台所へ行き朝食の準備をする。元の世界では料理に少しハマっていた時期があったためそれなりに自信はある。米を炊き、魚を焼いて味噌汁を作った。それなりの出来に満足していると、

「おーい！恭弥ー！迎えに来てやったぞー！」

玄関の方から萃香の声が聞こえて来た。早すぎるだろうと思いつながら玄関へと向かった。玄関を開けると萃香が蔓延の笑みで立っていた。

「お、やつと来たな。じゃあ行こっか。弾幕勝負するのにいい場所があるんだー。」

「おいおい待てて。俺まだ朝ごはんを食べてないんだが。」

「えー。そんな後でにしろつて。私も食べてないんだからさー。」

「なら食っていけよ。ちようど朝ごはんを作ったところだ。お前もぶんもすぐに作るから、な？食べてからにしよーぜ？」

萃香は不服そうな顔で

「うーん、まあいつか、じゃあお邪魔しまーす。」

そう言って萃香は靴を綺麗に脱いで中に入ってしまった。後に続いて恭弥も入って行き、台所で萃香のぶんの魚を焼いた。ご飯と味噌汁は少し多めに作っておいたからそれを出した。

「ほらよ、できたぜ。しつかり食えよ。」

「おう！サンキューな。んじやいただきまーす！」

萃香は魚を一口食べて「うまーい!!」と言いながらアニメのようにガツガツ食べていく。やがておかわり！とお碗を突き出して来てた。

「よく食べるなー。そんなに腹が減っていたのなら食べてから来たらよかったじゃないか。」

「それもそーなんだけど、恭弥との勝負が楽しみでさ。ちよつと早めに来ちゃった。」

そんなに楽しみにしてくれているとは思わず少し照れた。すると萃香が魚の骨を残し全てを平らげてご馳走様でした、と言った。少し遅れて恭弥もご馳走様でしたと言った。お皿を片付けるために皿を集め台所へ行き皿を洗い終わると、

「よし、じゃあ恭弥、行こっか！」

「おう、、で、結局どこに行くんだ？」

「人里から少し離れた場所にとつても広い場所があるんだ、あんまし人もこないだろーし、そこでやろうと思うんだけどいいかい？」

「ああ、いいぜ、じゃあ行こうか。」

そう言つて萃香の後をついて行つた。人里を離れて数十分したくらいで急に広い場所にてた。

「よし、着いた。じゃ、ここでしょつか。」

「わかつた。スペルカードは何枚だ？」

「んー、じゃあ二枚で。」

「オツケー。」

萃香と向かい合い、戦いが始まろうとしていた。すると萃香が。

「まあ、スペルカードつて言つても私は肉弾戦が得意なだけどね。」

「奇遇だな、俺もだよ。」

そう言つて恭弥は姿勢を低くして構えを取り霊力を上げる。霊力の大きさに驚いた萃香が

「なに、この霊力、霊夢と同じ、いやそれ以上、恭弥！あんた本当に幻想郷に来たばつかの人間!?!」

「二様な、だけど霊力を放出するより自分が纏つて戦う方が向いているらしい。」

霊夢との訓練中、能力のおかげで弾を作り出し放つことはすぐにできるようになったがどうも弾幕を考えて作るのが苦手であまりできなかった俺は放つのではなく自分に

靈力を纏わせて自信を強化して戦うスタイルを選んだ。そのおかげで靈夢にもたまに弾幕勝負に勝てるようになってきている。スペルカードは昔見ていたアニメや漫画の技を少しアレンジして作っている。

「じゃあ萃香、始めようか！」

「いいね、恭弥、私も燃えてきた！いくよ！」

その言葉と同時に萃香は地面を思いつき蹴って距離を詰めてきた。恭弥も地を蹴り距離を詰める。やがて拳と拳がぶつかり、衝撃波が生まれた。萃香はすかさずパンチを繰り返し恭弥を攻める。そのパンチを恭弥はかわし、時に避けてを繰り返した。

「ほらほら、防戦一方じゃないか！どんどんいくよ!!」

萃香の連打は止まらない。むしろどんどん激しくなっていく。一発一発が重く、これ以上は耐えられそうにない。

「なら俺も攻めさせてもらうぜ!!」

恭弥は萃香の足払いをして萃香の体制を崩した。少し宙に浮いた萃香のお腹に手を添えて大きく息を吸う。ゆっくりと自分の靈力を手に集中させて、全ての筋肉を使って放つ、肉弾戦奥義。

「魔弾!!!」

瞬間、萃香の体は遠くに吹っ飛んだ。がはつ、と肺の中の空気を全て出された萃香は

少しの間息ができなくなっていた。

「はあ、はあ、な、何が起こったんだ？」

萃香は自分が何をされたかまだわかっていなかった。手を添えられた後何をされたのかわからなかった。

「俺の肉弾戦で出せる大技つてところだ。どうだ？立てるか？」

「ああ、一樣ね、それにしても強いね、私の負けだわ。これ以上やつても勝ち目が見えてこないや。」

「いや、萃香もすごかったぜ？あれ以上は持ちこたえれそうになかった。」

「よく言うよ。あーあ、負けたのは霊夢以来だよ。やつぱり悔しいねー。」

そう言つて萃香は笑う。清々しそうな笑顔で。

「面白いや恭弥つてなんの能力持つてるの？」

「なんでもモノにする程度の能力だよ。」

「ひゃー、そりやすごい能力で。」

そう言つて服に付いている汚れを払って、

「また勝負しようね、恭弥。次は勝つ!!」

「ああ！望むところだ！」

そう言つて握手を交わした。

「じゃあまた、今夜の宴会でねー。鬼のみんなも呼んでくるからねー。」

そう言つて萃香は走つて行つた。恭弥は見送つた後自分の家に戻り、温泉に入った。それから今夜の宴会を楽しみに時間が経つのをゆつくり待つた、。

く午後5時頃く

ふわあー、とあくびをしながら大広間で宴会の準備をする。机をだしたり、台所で料理を作つたりしていた。すると玄関からコンコン、と誰かがノックする音が聞こえた。小走りで向かうとそこには霊夢が立っていた。

「久しぶりね、恭弥。ごめんね、宴会のこと言っていないで。」

そう言つて霊夢は少し顔を曇らせた。

「別にいいよ、それより早いな、準備か？」

「ええ、そうよ、ん？なんかいい匂いがあるわね。もしかしてなんか作つてるの？」

「ああ、なんか作つておこうと思つてな。まあ、とりあえず上がりなよ。」

「ええ、お邪魔するわ。」

霊夢は中に入って、スリッパに履き替えて、一緒に宴会の準備を手伝つてくれた。一時間後、ほとんどの準備を終えた頃、とうとうみんなが集まつて来た。いつの間にか大広間は多くの人が集まつた。知っている顔もちらほらあるが、知らない顔の方が多かつ

た。すると霊夢が

「じゃ、そろそろ宴会を始めるわよー！！」

「「「はー！！！！」」」

大人数が一気に声を張り上げる。地震が起きたんじゃないかというほどの揺れを感じた気がした。

「じゃ、主役に一言言ってもらって、乾杯するわよー。」

すると霊夢は俺に飲み物を持たせ前に出させる。

「えーっと、俺のために宴会を開いてくれてありがとう。今夜は楽しんで泊まってくれ。じゃ、かんぱー！！」

「「「かんぱー！！！！」」」

掛け声とともに一斉にみんなが飲み始めた。今日の夜は長そうだ。

## 始まる宴会、出会いの夜（後編）

宴会が始まり早速賑やかになってくる。どこに行こうかと周りを見渡すと萃香がこちらに手を振っていた。

「おい、恭弥ー、こっちきなよ。」

萃香のところへ行くと他の鬼がチラホラいた。「あれが萃香を倒したっていう外来人か。」「あまり強そうじゃねえな。」などと聞こえてくる。

「ほら、座りなよ恭弥、今日は飲むよー!」

そう言つて瓢箪を一気に自分の口に運ぶ。ゴクツゴクツと聞こえてくるぐらいのいい飲みっぷりだった。やがてふはあー、サイコーと声を上げる。恭弥も近くにあつた酒を少し飲んだ。久しぶりに飲んだが、やはりまだなれず、程々にしておこうと思つた。すると萃香が。

「あ、やつと来た。ちよつと遅いんじゃない?」

萃香が声をかけた方を見ると、おでこ辺りに大きな一本のツノが生えており、右手には大きな盃を持っていた。

「悪い悪い、少し道に迷つちまつてさ。ん?あんたが萃香に勝つたつて言う音街恭弥か

い？私は星熊勇儀って言うんだ。よろしくね。」

そう言つて恭弥の隣に座つた。

「ねえ、恭弥、萃香の次は私と勝負しようよ。いい戦いが出来そうだな。」

鬼は戦いが好きなのか？などと思ひながら「ああ、いいよ。」と返した。勇儀はやつた！と言つて盃をグイツと飲んだ。

「ところで恭弥、この温泉はいつ開くんさい？」

萃香がそんなことを聞いてきた。確かに、ちゃんと決めていなかったな。そんなことを思ひながら周りを見渡すとドンチャン騒ぎであちこち散らかっている。

「これは、明日からは無理そうだな。せめて明後日からにするよ。」

「おつけー、じゃあその時に行かせてもらおうよ。」

「ああ、ぜひ来てくれ。歓迎するよ。」

そのあとは萃香と勇儀と他愛もない話をしながら、少しずつ酒を飲んでみると霊夢がこちらに手を振りながら大声で

「恭弥ー！こつちにも来てよー！合わせたい人がいるのー。」

「わかつた！すぐ行くよ。じゃ、またな萃香、勇儀。」

そう言つて二人のもとを離れて霊夢のところへ行つた。霊夢のところには見知らぬ二人がいた。

「あなたが恭弥ね。初めまして。私の名前はレミリア・スカーレットよ。レミリアって呼んで。」

レミリアという少女は見た目は幼女だが、気品に溢れていた。背中からは黒い翼がはえていて、人間ではないとすぐにわかった。

「ああ、よろしくレミリア。そっちの人は？」

そうやってレミリアのななめうしろに立っている女性を見た。綺麗な銀髪にメイドの格好をしている。なんとも仕事ができそうな感じだった。

「私は紅魔館でメイドをしている十六夜咲夜と申します。気軽に咲夜とお呼びください  
恭弥様。」

そうやって綺麗なお辞儀をする。

「様なんてつけなくていいよ。普通に恭弥って呼んでくれるとありがたい。」

「わかりました。ではこれから恭弥と呼ばせていただきます。」

恭弥は咲夜の敬語がなくなり、友達のように話せたらいいな、と思った。時間が解決してくれるだろうと思っているとレミリアが

「ねえ恭弥、いつか紅魔館に来てくれないかしら？ 貴方とゆつくりとお茶をしたいのだから。」

「ああ、別に構わないよ。けれどこの宿のこともあるからまた時間ができれば行くよ。」

「そう言ってもらえると助かるわ。私もこの宿の温泉を入るのが楽しみだから開店日に来るわね。紅魔館のみんなを連れて来るわ。」

そう言つて笑顔で去つていった。咲夜もこちらに一礼してレミリアの後を追う。レミリアたちは挨拶に来ただけだったのだろう。

「ほんと、幻想郷にはいろんな人がいるな。」

まあ人というか種族というか。この世界は新しいことばかりでこれからが楽しみだと思つた。

「じゃあ恭弥、この宴会はあんたが主役なんだから楽しみなさいよ？私もそこらへんにいるからまた来てよね。」

「おう！ありがとな霊夢。お前も楽しめよ。」

そう言つて霊夢は魔理沙たちのところに行った。

「さてと、次はどこに行こうかな。お？あれはニトリだな。周りにいるのは同じカツパか？」

ニトリを見つけてそこへ歩き出す。ニトリはカツパたちと何やらよくわからない話をしている。

「STAP細胞は、あります!!」

はいアウトー。それは言っちゃダメだろう。ていうかそんなメタイ小説だったか？

ていうかこんなこと言ってる時点でもうメタイわ。

「だからー、あるんだってば!!、、ん？やあ、恭弥楽しんでるかい？」

「ああ、おかげさまでな。てかなんの話してんだよ。」

「人類の可能性を仲間と話し合ってるのさ。恭弥はあると思うかい？」

「いや、ないだろ。」

そういうとニトリは、笑顔で

「だよねー、あつたら革命的だけど見つかってないしねー。」

「いや、さつきあるって言ってたじゃないか。」

「あれは昔誰かが言っていたから言ってみただけだよ。」

「そうか、ならもうにどと言うなよ。わかったな？」

「わ、わかったよ、、。」

恭弥の圧力で冷や汗をかきながらニトリは答えた。するとニトリの近くにいたカップパがこちらに手招いて来た。そちらに行くどガツと肩を組まれて強制的に座らされた。するとカップパが耳元で

「おい、恭弥とやら、あんたここの宿主なんだろ？カップパの漢として頼みがある。」

真剣な顔で言っではいるが、何やら嫌な予感がする。

「いいか、よく聞けよ。頼みっていうのはだな、、、」

女湯にのぞき穴を作つて欲しいんだ!!」

まあ、予想はできていた。温泉での漢の頼みなんて覗きとかそんなだからな。

「もちろんタダとは言わねえ。これでどうだ?」

そう言つてカツパの懐から出して来たのはこの世界ではないと思つていた漢の必需品と言つていい、いわゆるアレな本だ。それを見た恭弥は

「おい、お前、これをどこで?」

恭弥はそういつたことにかんして興味が無いわけではない。むしろ好きといつていい。

「外の世界のものがたまに流れて来るときがあるんだ。これは俺らの川で唯一見つからずに俺らに流れて来た、宝物だ。こいつをやるからのぞき穴を作つて欲しい、作つてくれるだけでいいんだ。お前ならこの気持ちわかるだろ?」

こいつらの気持ちは痛いほどわかる。だが問題が一つ。

「いいだろう。ただし一ついつておきたい。」

「なんだ?」

「もし見つかつてみる、、お前ら確実に死ぬぞ。」

「この世界の女性は皆恐ろしく強い。そりやもうやばい。もし見つかったらもう二度

とここには来れないだろう。するとカツパ達はフツと笑って言った。

「見れるなら、どうなつても構わねえ、どうなつてもいいほど俺らは夢が見たい。」

そう言つてみんなは覚悟を決めた漢の目になった。もう帰つてこれないと悟つた兵士のような顔つきだった。

「、わかつた。明後日までに作つておこう。ただし！俺のことは一切他言無用だ。これを守るならその任務、必ず遂行してみせよう。」

するとカツパは希望に満ちた顔で

「やっぱりあんたはわかるやつだ!!わかつた。お前のことは一切言わない。約束だ。恭弥、酒を持って、カツパを代表して兄弟の盃をかわそう。俺の名前は河上浄伍（かわかみじょうご）、よろしくな。」

そう言つて浄伍と恭弥は腕を組んで酒を飲んだ。周りのカツパが大騒ぎになつていく。すると鬼の漢達もやつて来て

「話はカツパから聞いた。我々鬼も恭弥と盃を交わしたい。私は鬼の漢代表、鬼丸角吉（おにまる かくきち）カツパと呼んでください。」

そう言つてカクとも盃を交わした。人間、カツパ、鬼の3種族の同盟（漢のみ）が今できた。なんとも奇妙だが、こいつらとは腐れ縁になりそうだ。

外は真つ暗な闇になり静けさだけが残っている。少し外の空気を吸いたくて外に出てきた。中ではまだどんちゃん騒ぎが続いている。

「ふう、おい、そろそろ出て来てでもいいんじゃないやねえか。」

自分の横、ないもない空間に話しかける。するとその空間がパツクリと割れ、無数の目が見える空間から紫が出て来た。

「……、なんで気づいたの？誰にも気づかれないのだけど？」

「俺の周りに気で円を描いた結界のようなものを張っていたんだ。円に入ると反応するようになってるんだよ。あんたは外を見るために少し隙間を空けているだろ？そこから出ている妖力を感じ取っただけだよ。」

それを聞いた紫は大きく目を見開きやがてふう、とため息をはくと

「やっぱりあなた、凄いわね。私、貴方にどんどん惹かれていつてる自分がいるわ。」

そう言う隙間から出てきた。すると紫は酒を持っていた。

「ちよつと一杯、付き合ってくれる？」

「ああ。いいよ。」

紫から一杯もらい乾杯する。クイツと飲むと紫が

「どう？幻想郷は、面白い所でしょ？」

「ああ、とっても面白い所だよ。外にはないものがいっぱいある。ここにきて本当に

良かった。この世界は紫がつくったんだろ？人間と妖怪の共存する世界を作るなんてとても凄いいことだと思う。きつとこれまでとても苦しいこと、悲しいことがあったと思う。それでもこの世界を作るために必死だったと思う。本当にすげえよ。」

すると紫はこちらの顔をじーっとみてボンツと顔を真つ赤にした。

「そ、そうかしら、。そんなに言われると照れるわね、。。」

なかなか見れないであろう紫の照れるところを見て恭弥はどきつとした。恭弥も顔を赤くしながら

「ま、まあ、これからよろしく頼むよ、紫。」

「ええ、改めてようこそ、幻想郷へ。」

そう言つて紫はそろそろ帰ると言つてスキマの中に消えて言つた。恭弥は外から騒ぎのする自分の宿を見つめた。これから始まる生活の中でどれほどの出会いがあるのか、それはまだわからない。ただ、これから先の出会いはきつとかけがえのないものになる。そんな確信を持てる思いを胸に恭弥は喧騒が鳴り止まない光の中へ入つていく、。。

## 式神と漢の約束

宴会は朝まで続いた。ほとんどの人は寝ていたが、まだ酒を飲んで話し合っている。恭弥は明日も忙しいので早めに寝ていた。朝起きて見ると会場はもう床が見えなほど空き瓶や空になった皿がいっぱいあった。みんなが起きると役割を決めてせっせと片付けを始めた。人数が人数なので片付けはすぐに終わった。終わるとみんなはまた明日来ると言って帰って行った。みんなを見送って自分の家に入って自分の部屋に戻ろうとすると紫ともう一人がお茶を飲みながらちよこんと座っていた。なんているのかわからず恭弥は言った。

「なんで勝手に人の部屋に上がってるんだよ。」

「それについてはごめんなさい。少し貴方にお話があるのよ。」

なんだろうと思いつながら紫の前に座る。

「明日からこの夢見郷を開くための準備をしないといけないからなるべく手短でたのむな。」

「約束はできないけど善処するわ。じゃあ、話に入るけど、その前に藍を紹介するわ。私をサポートしてくれる優秀な式神なのよ。」

そう言つて紫は藍を見る。それにつられて恭弥も藍を見る。少し短い金髪の神に九つの美しい尻尾。一本一本が三日月のように輝いていて見とれてしまう。触りたい！と言ふ衝動と戦つてしていると

「八雲 藍（やくも らん）だ。君のことは紫様から聞いている。外来人で能力持ち、しかもとてつもない霊力を持つているそうじゃないか。紫様に頼まれて君に教えることがある。」

「俺に教えること？ 一体なんなんだ？」

一体なんだろうと思ひ藍に聞くと代わりに紫が答えた。

「いくら周りの人達が手伝つてくれるからと言つて限界があるわ。そこで、貴方一人で宿を開けるようにするの。そうすれば周りの人も手伝わなくていいし、スムーズに營業できるつてわけよ。」

「そんな方法があるのか!? ぜひ教えてくれ！」

「それを藍から教えてもらいなさい。貴方の能力と霊力があればすぐにできるわ。」

藍の方に顔を向けると真剣な顔で

「ただし、悪用することは許さんぞ。わかっているな。」

威圧的なこえで藍は言つた。少し妖力が溢れていることからもし悪用すればどうなるかがすぐにわかつた。

「ああ、約束するよ。絶対に悪用しない。」

「こちらでも真剣な眼差しで答える。」

「よしならば教えよう。私が今から教えるのは式神に関すること全てだ。まず式神と言うのはだな、、、。」

そう言つて、藍の式神授業が始まる。本当に簡単に言うなら結○師に出て来る後片付けなどをしてくれるあれだ。(わかる奴にはわかる)他に藍みたいな妖獣に式が付いたものも式神と呼ばれるそうさ。まあ、妖獣なんてそうそういるもんじゃあないだろうし、簡単な○界師の式神にしようかな。そんなことを考えながら30分で授業は終わった。

「、、、と言ふことだ。どうだ?わかったか?」

「ああ、ありがとうな藍。よくわかったよ。早速やつて見る。」

過去にみたアニメを思い出しながら紙に四角の模様を書く。目を瞑り、姿カタチを頭の中に描く。霊力を紙に集中させ、手から放つ。

「いでよー式神!!」

ボフォンと煙を出して現れたのは思い描いた通りの姿カタチをの式神だった。顔には黒い四角が描かれている。小さいが力持ちでなんでもできる式神だ。それをみた藍が。

「ほう、凄いな、もうここまでできるのか。やはり恭弥の能力は凄いな。」

ちよんちよんと式神を突きながらそんなことを言う。その言葉に少し照れた恭弥は頭をぼりぼりとかいている。すると紫が

「これで難なく宿を開けるわね。じゃあ私は明日を楽しみにして、今日は帰るわね。じゃあね恭弥。また明日。」

そう言つて紫はスキマを出した。

「それでは恭弥、また会いましょう。今度はゆつくりとこさせてもらいますね。」

「ああ、待つてるぜ。また来てくれよな。」

そう言つと紫と藍はスキマの中に入つて消えて言つた。

「さて、ひとまず式神を作つていきますかね。」

紙を作つて式神を作るのを繰り返して30人の式神ができた。みんなそこらへんの妖怪には負けないほどの霊力をつぎ込んで作つた。

「あとは俺がいない間、こいつらを任せられる奴がいるな。」

そう言つて作つたのは執事のカッコをした美青年だった。ありつたけの霊力を作つたから相当強くなつていゝはずだ。弾幕ごつこもできる。名前だが執事と言つたらセバスチャンだろうと思ひセバスチャンにした。

「よし、セバスチャン、そいつらの指示はまかせろ。明日までにこの夢見郷を開けるようにしてくれ。あと男子風呂の方は俺がするから誰も入れるな。いいな。」

「はっ！わかりました。恭弥様。」

そう言つて周りの式神に指示を出していく。手際が良くスムーズに手分けして掃除や準備をしてきている。自分の作つた式神に満足しながら恭弥は男子風呂へと足をすすめた。

恭弥が男子風呂を掃除すると言つたのは昨日の宴会であつた約束を果たすためだ。ただ穴を開けるだけでは気づかれるだろう。だからそれぞれの種族に見やすく、かつバレない穴を考えた。カツパたちには女湯と男湯をつなぐ通路を繋ぎ、温泉の中から見もらう。鬼には壁に穴を開け、結界でカモフラージュしてあつちからは見えないけどこちらなら見れる穴を作つた。ただ、結界がばれてしまえばそれで終わりだ。まあ、それはもう知らん。一時間ちよつとで穴を作り結界を張つた。あとはあいつらに頑張つてもらうしかないな。俺は見ないけどな、見ないけどな！

秘密の穴を作つたあと、他の場所の点検をして回つた。セバスチャンのおかげでも早くに終わることができた。式神には何部屋か貸してそこで寝て、また明日働いてもらう。さて、明日も忙しくなる早く風呂に入つて寝よう。浮き立つ心を鎮めるように静かに瞼を閉じた。